

入選 佐賀県 横尾 美帆子 様 (30代)

私の家族は夫、幼い子ども二人と夫の母の五人で、夫は障害年金を受給している。夫は職場で病気となり、何年経っても治らず退職することとなった。そしてすぐには働くことができないため、現在通院し薬や自分と戦っている状態である。一方、子ども達はすくすくと成長中で、そんな子ども達を朝送り、仕事に向かう日々を過ごしている。

私が障害年金に出会ったのは、職場の異動により、年金を担当するようになったからだ。それまでは、夫も私も言葉すら知らずにいたため、とても幸運な出会いだった。職場の異動前から、夫は家の階段を降りるのもフラフラで、病気も一向に治らず、家族も病院に付き添い、私も義母も子ども達も全員心配する状態だった。子ども達からは「いつお父さん治るの?」と何回も言われ、いつ治るかわからないため、「いつかきっと治るよ。」とだけしか言えないでいた。夫の病院に付き添った後、自転車で職場に向かう途中、たまたま流れていた音楽を耳にし、涙が出てきたこともあった。夫も、回復するように、様々な方法を実践するも、薬が減ったと思えば、逆に増えたりしたりと、なかなか自分の身体がすぐに元に戻ることもなく、それでも立ち向かって頑張っていた。私は、異動になって障害年金を勉強し、早速手続きに取りかかり、夫が退職後すぐに、タイミング良く障害年金が振り込まれた。その時夫から「手続きをしてくれてありがとう。」と言われたことがとても嬉しかった。住宅ローンや、子どもの学費、生活費と何かと出費がかさむ中の夫の退職、そしてすぐに働けないため、障害年金は、とてもありがたかった。正直、子どもが習いたくではじめた習い事を続けることは難しいかなと思っていたため、この受給のおかげで辞めないでよくなり、子どもにとっても好きなことを続けていくことができ、家族みんながこの障害年金に感謝している。

また、夫が学生の時に義父が亡くなったため、遺族年金支給で義母はいく分助かったようである。

年金とは、本当に困っている時、助けになってくれるものだと痛感した。人はいつ病気になるかもわからないし、いつ死ぬかもわからない。本当に困っている時に、助けとなってくれるものは数少ないかもしれないが、年金を納める意味は年をとってからだけではな

く、本当に困った時の助けとなるものだと思う。年金手続きに携わる者として、日々勉強し、手続きされる方々に寄り添える職員となるよう努めていきたい。また、子ども達が大人になり、また次の世代、その次の世代も、安心して暮らしていけるよう、年金の支払いの意味も伝えていきたい。さらに、障害年金を知らずにいる方々にも、広く知ってもらえるよう取り組んでいきたい。